

資 料

デヴィッド・アレアノ ガルト

多文化的環境における行政学の将来： アングロ・サクソン，ラテン，東アジアそして スカンジナビアの行政的諸伝統からの教訓

堀 雅 晴 (訳)

要 約

比較分析は、行政学の4つの異なるモデル（アングロ・サクソン，ラテン，東アジアそしてスカンジナビア）から成り立っている。今回の比較の目的は、行政学の伝統を組み込んでいるこうした「理念型」が権力問題をどのように取り扱うのかを分析することである。私の議論はいかなる社会においても官僚と政治家が所有する権力総体の問題について理解と対決をすることなしに、行政学が現実世界のダイナミクスについての理解と、それ故に学問としての成長の双方にとって、不利な条件を背負ったままの状況に置かれたままになるであろうというものである。最近流行しているニュー・パブリック・マネージメントという考え方がもつ普遍主義的主張にも関わらず、この議論は妥当するのである。

行政学と権力

数十年間において行政学は、最も流行する有力な理論を追求する学問としてあり続けている。この説明は、大人になりきれないままの学問にとっては明白なことである。この点でひとつの重要なポイントは、この観点についての分析がほとんど回避されてきていることである。もしも行政学が流行するように切望されるのであれば、こうした事態は行政学における強固な基盤の必要性にとって明白な根拠となっている。しかしながらそうした強固な基盤が求めに応じられるものなのか、そしてそれがどこにあるのかという疑問が存在する。マネージメントのテクニクないし

は抽象的な理論が語られるなかにあって専らそうした強固な基盤の探求には、共通の誤りが犯されることになってきている。私見によれば行政学はその基盤がまた、各国の政治文化ないしは総合的な文化的伝統にも組み込まれている点を言わなければならない。

全国的な文化的伝統はまったく多様なものがある。明らかなことは行政学の開発が多様なコンテキストのなかで、異なる諸パターンに従っていることである。私たちの目的は、4つの異なる行政学の伝統（アングロ・サクソン、ラテン、東アジアそしてスカンジナビア）について分析と比較を行うことである。明らかにこのようなカテゴリーは個別の国々の場合よりも、範囲の点でより広範囲に及ぶことになる。またこれらのカテゴリーは、個々の伝統の内側に埋没するかもしれない実際の圏域・国そして諸地域において、私たちが遭遇しうることができる豊富性と複雑性を単純化するものである。しかしながら私たちは、そうしたすべてを包括する、超国家的な理念型が有益なものでありうるとの見解を持っている。こうした理念型は私たちがここで述べようと努めている中心問題に向けて光を放つ能力を、私たちに与えてくれている。このことは多様な伝統もすべて、さまざまな方法をもってしても民主的社会における行政学の最重要問題、すなわち政治権力の行使と限界に対する解決策を見出すことができないという理由からである。

本稿の議論は、いかなる社会においても官僚と政治家が所有する権力総体の問題について理解と対決を行うことなしに、行政学が現実世界のダイナミクスについての理解と、それ故に自らの成就にとって、不利な条件を背負ったままの状況に置かれたままになるであろうというものである。前述の権力問題は決定的であり、多様で文化的なセッティングは、本当に様々な方法でその権力問題と対決してきている。最近、国際的に流行する行政学であるニュー・パブリック・マネージメント（以下、NPMと略す）ですらも、当該問題を解決することができない。その理由はNPMが統制ファクターとして明白な、政治的で組織的な権力を否定するという重大な誤りを犯しているからである。さらにNPMはあらゆる文化的コンテキストにおいて行政に対して、まったく同じ改革の処方箋を提案するからである。こうした過剰に単純化された普遍化は、多分、NPMの最大の重大な誤りのなかのひとつである。

アングロ・サクソンの伝統

行政学のアングロ・サクソンの伝統は、権力否定〔下線は訳者によるものである。なお原文はイタリック体である。以下、同様〕を通じて自己開発してきている。そ

の伝統の傾向とは政治を無視することと、官僚制の統制と官僚による捕虜化からの回避のために主要な手段として、中立性と専門職的行政を奉ずるものである（Wilson, 1887）。アングロ・サクソンの伝統において、アカウントビリティが堅持されなければならないことと、効率性が行政の本当の使命であると信じられている（Gulick, 1937）。換言すれば効率的で中立的な官僚制は社会を発展と繁栄に導くであろう（Waldo, 1948）。〔しかしながら〕官僚制は相変わらず、彼らに権力が与えられるならば危険なものとなる。それゆえに社会は四六時中、官僚制をコントロールしておかなければならない。とりわけたとえ中立的な官僚制である場合でも、権力の誤用があるかもしれないからである。このことは官僚制から権力を取り返し、彼らがそれを使うことを許さないことが必要になっていることを意味する。そのためには、いかなる方法があるのか。政治的・社会的意思の単なる手段的な執行者として官僚制を考えるならば、官僚は「公共」の「僕」として単に執行だけを行うものである（Ostrom, 1972）。この世界観に従うならば、政治が行政のなかに立ち入ると必ず、問題は持ち上がり、効率性は歪曲されることになる。

ラテンの伝統

ラテン・モデルはまったく異なっている。当該伝統においては、権力は偏在するものである。政治家と官僚は、明らかに権力的であるとしてみなされる（Guerrero, 2000）。彼らは社会からの明示的な権限付与によって、権力の行使・配分、そして権力手段を使った不確実性のコントロールを行うものである（Barenstein, 1982）。同時に彼らは、権力の適切な使用に責任がある。とりわけこのことは、ラテンのコンテキストにおいて、開発にとっての諸条件を創出することを意味する（Meny and Thoenig, 1992）。

しかしいかなる権力の編制にあっても前述のとおりであるべきであり、社会が発展するために認められているのである（Padileou, 1989）。こうした点に関する主要な関心事は、いかなる形態で、政府のリーダーたちが強大な民間グループと多分に緊密すぎる関係から、彼らがそうしたグループに全面的に恩義を受けることなく社会のニーズにかなりの程度まで対応することができるのかどうかという点にある。したがってラテン・モデルは権力問題に直接的に向き合っており、そして政治・経済そして行政がかなりの程度にまで絡まりあっているものと考えられている（Cabrero, 1995）。

それにもかかわらず権力のコントロール問題が、このラテンの理念型に相変わらず

ず存在する。そのようなコントロールが可能であると仮定すると、このことは政治家・官僚そして鍵となる市民社会の形態の間で、それらの強力なリンケージを通じておそらく達成されうるものであろう(Motta, 1989)。またそれらの間で引き続き行われる政治的議論は、社会の様々な部分が有する諸価値を明白に是認しなければならぬものとなる。同時に官僚制は実在する政治的多元性を受け入れることができ、また様々な社会的グループへの公的なアクションの諸結果を十分に理解する必要がある(Crozier, 1989)。換言すれば行政学は政治的感性(political sensibility)を必要としている。その理由は効率性が、成功を評価する唯一の方法ではありえないからである。すなわち多元的で紛争の起こる社会における政治的・社会的感性はまた、効率性のアジェンダよりも常に多くの場合において、大変重要なものとなるからである(Kliksberg, 1992)。

東アジアの伝統

当該モデルにおいて権力はまた、直接的に配分されている。すなわち社会はコミユニタリアン的な手段を通じて公共財を探し求めている中で、異なる役割をもった様々なアクターの複雑な組合せである。その結果、権力は存在しており、それは腐敗ないしはカオスに向かって共同体を指揮していく可能性を常に有しているものである。こうした可能性を回避するために社会の一定のグループは、社会全体に代って意思決定の特別の役割を担っている。一旦意思決定がそうしたエリート・グループ(学識と創造力のあるエリート)によって行われるならば、共同体での政策執行はたとえ服従を通じてであっても期待できるものとなる(Kim, B. W. and Bell, D., 1985, 74)。

政府とその行政部は、その均衡の中心部分である。その理由は政府と行政部が諸決定を行ったり、そのなかの最も重要な決定の執行に責任を持ったりするシステムの、機能的な部門であることを期待されているからである。政治的な安定性は主要なもので、一般的ないしはグローバルの価値であり、公共部門のすべての被雇用者は集団の目的達成のために働いていると仮定されている。一旦行政命令が下されるならば、厳格な服従は期待されているのである。凝集性は中心的な価値となり、その点で東アジアの行政モデルは集権性と集団主義の独特の組合せに依存している。そこにおいては普遍的な目的がまったく重要なものとなっている。権力はそこに存在しており、啓蒙的なエリートの貢献によって集団の正当性が普及している。東アジア・モデルはおそらく西洋の行政学理論の侵入と押し付けから、最も影響を被っ

ているものである。東アジア・モデルとアングロ・サクソン・モデル（あるいは例えばラテン・モデル）の間にある，とてつもない相違を知るならば，東アジア・モデルとその文化的ルーツの固有性をよりよく理解するための，強力で厳密な比較論はその開発に大変な困難が付きまとうものである（Welch and Wong, 1998, 42）。西洋で行なわれる分析の傾向は比較を論じる際に，「西洋」の諸価値が東アジア諸国の中にどのようにして組み入れられるべきなのかを取り扱っている規範的議論に還元されているように思われる。

スカンジナビアの伝統

行政学のスカンジナビア・モデルは集団の行政能力に対してして，強力な信条と自信を強調するものである（Laegrid, 2001）。権力は存在し，そして社会的関係性の必要な形態となっている。そして個々人と諸グループは，集団性の普遍的価値（すなわち当該価値が社会で一般的に満足いく状態を裏書したり，その状態を彼らの諸行動にとって最重要なものとする）を保証することが期待されている。スカンジナビア諸国はあらゆる党派との平和共存のなかで生き抜いていくために，均質的で，議会を基盤とする政治的リーダーシップの長い伝統を有している。このスカンジナビア・モデルは利己的な諸個人間の不信感に基づくアングロ・サクソン・モデルに対して，信頼を最も重要な価値として考えている（Christensen et al, 2001）。こうした環境においてはコントロールの必要性は個々人の本質が利己的であるという理由からではなくて，人が学習したり，集団ニーズに気づいたりするために時間が必要であるという理由からである。ラテン・モデルとは異なり，スカンジナビアでのエリートの権力は，社会のコントロールの「外側」にあるものではない（すなわち社会の内側にある）。ラテンの伝統において権力とエリートによるその行使は確固な現実となっており，より広範な社会的な利害関係から継続的な警戒が求められている一方で，スカンジナビアの伝統においてはエリートは社会のなかの絶対必要な部分となっている（そういう意味からいうと彼らは，集団のニーズを十分に承知していると思われる）。したがってスカンジナビアの行政は基本的にニーズの集合によって組み立てられた構造をもち，そして「一般意思」に合致するような諸結果を生み出す「ブラック・ボックス」である（Olsen, 1983）。こうしたコミュニタリアンのパースペクティブにおいては東アジア・モデルとは異なって個々人がほとんど等しく，政治的諸目的の諸結果と諸適用に対して責任をもっており，したがってエリートの意思決定構造が回避されなければならない。行政学は一

般的な福祉への参加のために、個々人の責任を向上させなければならない。また行政学の継続的な重大事は平等で、集成的な政府の諸結果を生み出すことにある。したがって権力は問題とはならない。権力は責任ある集合行為のための手段である。

4つのモデルの分析

以上のことから、4つの異なるモデルの評価はそれらのどれもが、まったく正しくて、あるいは全部間違いであるということではないことを示している。しかしながらこれらのモデルに関する賛否両論は、まったく異なっている。

まずはじめにアングロ・サクソン・モデルでは、政府マネージメントについての非政治的見解が非現実的なものである。同モデルは組織の内と間での権力闘争が、あらゆる公的組織と制度においも共通すると認めるものではない。その代わりに同モデルはそうした闘争を病的なものとして非難する(すなわちそれは病気に罹っているために、「中立的で」「無菌の」、ただし効果的な、コントロール可能な官僚制によって代替されなければならない)(Osborne and Gaebler, 1993)。したがって当該モデルは官僚制をコントロールするために、一組の強力な手段を創出することを強調する。官僚制の監督とコントロールについて十分に効果的な制度を構築することが、高い優先順位となっている(Light, 1993)。その結果としてアングロ・サクソン・モデルは、官僚制のマネージメントに対するコントロールとチェック・バランスの構築に、大変な効果がある。アングロ・サクソンの社会がこのアプローチに対して支払わなければならない重大なコストとは、たとえ行政学が政治と権力を究極において取り扱わなければならないことが明白なことであり、当該行政学がこうした権力の現実性についての側面を、その視界から隠したままにしておく必要があるというところにあるのである(Selznick, 1949)。

ラテン・モデルはより一層リアルなものであるけれども、同時により一層シニカルなものでもある。当該モデルにおいては社会は同じ時にあらゆる場面で政府と政治家の有する権力に、不信を持ち、賞賛を表わし、羨望を示す。この政府の役割は明白で重要なものとなっており、官僚は政治システムの不可欠な部分となっている。そして誰でも、こうしたことを否定できる者はいない。しかしながらこうした権力が与件とされるならば、官僚は開発のための責任を持たなければならない。しかし開発が満足のいく結果を獲得するために必要な前進を決してみないことから、よく多くの開発〔結果〕を獲得するために、より多くの権力が常に必要とされるといふ悪循環が生じることになる。このことは官僚制のコントロールを、より一層困

難なものにしてしまう。こうしてこのラテン・モデルは官僚制のコントロールや官僚権力の制約に関して、アングロ・サクソン・モデルほどに効果を持つものではない。事実、多元的社会的コンセンサスに関するラテン・モデルの明白なビジョンでは、公的なリソースの効果的な利用およびコントロールやアカウンタビリティの受諾についての官僚制の責任に注意を払うことなく、巨大で強力な官僚制の形成を事実上促進し続けてきているのである（Arellano and Guerrero, 2003）。紛争はこの伝統においては偏在するものであり、強力な官僚制に手綱をつけて制御することは常に困難が伴うことである。

東アジア・モデルはある特異な問題、すなわち異なるグループの要求に実際上応えるエリートの意思決定と、エリートが自分自身の目的達成のためにその他のグループを屈服させたり支配したりする政治的プロセスとの間の区別をどのように行うかについての経験を有している。グループないしは個人的な権力行使が例外的であって、ひとつの集合的で本来的な目的から逸脱したものであるという明白な見解のほかに逸脱行為を観察することが困難ななかでは、プリューラリズムが、そうした文化的な枠組みの下で適応するものなのかといえれば難しい問題である（Chull and Shyu, 1997）。ある者たちですら、いくつかの東アジア諸国に十分に埋め込まれている儒教的価値が、ここに置かれている最後の問題への回答を困難なものとしているという考え方を擁護する。その理由は秩序は常に自由より上にあり、義務は常に権利の上にあり、そして集団は必ず個人よりも上にあるからである（Fukuyama, 1995）。このような中では、紛争が集団的プロジェクトの再定義に関わるいくつかのグループの闘争の表現であるかもしれないと考えること、あるいはエリートが政治的で行政的なアジェンダに対して影響を与える自分たち以外のグループを退けて、保守的な役割を演じているかもしれないと考えることは難しいことなので、紛争は例外として現れるものとなる（Helgesen, 1998）。

対照的にスカンジナビア・モデルは無知でもシニカルでもなくて、信頼に基礎を置くものである。同モデルにヒューマニスティックな面があることは、否定できない。同時にまた、社会のなかの集団間にある権力に関する様々な程度のリアリティを隠蔽するものである。付言すれば同モデルは集合財に広く認められたレトリックによる見方からは覆い隠されている、個人個人の自己利益に対する追求能力を過小評価する傾向がある（Bjorklund, 2002）。明白なことではあるけれども公正と正義は、普遍的なカテゴリーではない。しかしもちろん議論され構築される必要のある社会的概念である。競合する諸利益は継続的に交渉されなければならない。したがってスカンジナビアの行政学は相互信頼と集合的価値への全体的な忠誠にも関わらず、

必ず政策ジレンマに遭遇することになる (Laegrid and Olsen, 1984)。すなわち特別の利益が公共財の制約された枠組みを越えて作動する場合にはいつでも、スカンジナビアの伝統は個人とグループが私的な褒美を求めているということをおおびらに認めることよりも、一般的な言説のうわべの陰に隠れて非効率と私腹を肥やす行為を隠蔽する傾向がある (Bjorklund, 2002)。

以上のとおりに、各モデルには強みと弱みが存在している。そして行政学にとってより多くの成熟度を得る能力は、その学問が様々な諸国と文化を超えて変化に富んだ特別の状況のなかで位置づいていることに対する、寛容性を獲得することである。それぞれの行政学をもつ国レベルのサンプルとしては、やはりそれ自身の伝統のもつ政治的な権力枠組みと、当該権力に対する社会的コントロールの必要性とをしっかりと把握しておかなければならない。同時にあらゆる国々は能力のある政府と政治家を求めている。あわせてそれらをアカウンタブルなものとする必要性と、プロセスとアウトカムへの考慮ばかりではなくて、正義と公正を尊重することも求めている。しかしながらこれら 4 つのモデルのいずれもが、この目標への明確なルートを提供しているとは思えないのである。

ニュー・パブリック・マネージメント

当該分野〔行政学〕にとって事態をより一層悪化させてしまうことは、当該世界の沿岸地域の海岸に打ち寄せるニュー・パブリック・マネージメント (NPM) の大津波が、次の疑問を完全に無視しているようにみえることである。NPM は様々な社会における、民主的なマネージメントに関する行政学の多様な諸形態についての必要な考察が不要であるとして拒絶する一方で、あらゆる現実に対してひとつのタイプの解決策で対処しようとするものである (Laking, 1999)。ここからは前述の 4 つのモデルの NPM との関連から、この点をさらに敷衍していくことにする。

アングロ・サクソン・モデルの点からみると、NPM はそのモデルから多くのことを提案する。すなわち政治の「有害な」影響から公共部門のマネージャーをより一層分離することである。必要なこととして主張されることは中立の審判者 (たとえば市場ないしは、どのような制度的な代用物であろうとも) による、コントロールされた、より一層中立的な官僚制である (Niskanen, 1972)。NPM は再度、官僚制の行動を指揮する政治家の責任と同様に、社会の秩序・公正を維持するために公的官僚制のもつ権力と責任についての課題を回避しつつ、行政学の政治的本質を隠蔽するものである。

ラテン・モデルにおいて NPM は、シニシズムをより一層多く生み出す傾向にある。 NPM は社会に対して一定のアジェンダを課すために、この目的のために技術的で経済指向の言説を活用しながら、強力なグループによって用いられる代替的戦略としてみられているものである（Spink, 1999）。ラテン・モデルの観点からみた市場による解決策は、現代的でテクノクラートの様相をまとった権力の操作方法としてみなされている。またより一層多くの中立性を〔エリートが〕要望〔する意味〕は、普通の市民の犠牲の下で意思決定権力〔の行使〕を任せられている、専門家によって始められた戦略としてみられる。社会は当該モデルの下で、ある役割を担っているであろう。またその場合に役割の中心が政治家と官僚が社会からのコントロールを回避するために行う権力ゲームよりも、むしろクライアントからの苦情からのそれとなる（Guerrero, 2000）。NPM に関するラテンにおける文献は NPM の本質がはっきりと露呈されてしまうと、これまで以上に権力問題がより生々しい状態になり、そのなかで勝者と敗者が顕在化してしまうことを明確にするものである（Arellano, et al, 2000）。

東アジア・モデルにとって NPM は、ひとつの助言を提供することができるだけである。 すなわちそれは、より一層アングロ・サクソンになること、である。そしてある儒教的価値を傍らに置いておくか、あるいは社会のエンパワーメントと権力の分権化を伴いながら「民主主義への儒教の道」を発見するかである（Moon and Ingraham, 1998）。アングロ・サクソンのもつ懐疑主義が強力なエリートへ向かうと考えられる場合においてのみ、「私たちのグループ」というメンタリティは有益なものとなるかもしれない。すなわち当該エリートは NPM 型改革が政治的均衡に影響を与えるかもしれない場合においてのみ、用心深くなるのかもしれない（Common, 2004, 348）。NPM がエリートと社会の複雑なリンケージを、どのような方法で対処するのかを想像することは困難なことである。そのことは当該リンケージが文化的にみて基本的で同質的なものとして考慮されたり、多元的利益に基礎を置くものでなかったりする場合には、なおさらのことである。

最後にスカンジナビア・モデルにおいて NPM の考え方は人間の意志に対してペシミスティックであり、人間の動機付けに対してナイーブであるとみなされている。 前者については官僚と政治家が根本的にみて、利己的なアクターであるとの NPM の仮説によって生じていることである。後者については官僚がパフォーマンスないしはアウトカム測定に、熱心に対応するだろうとの NPM の夢想によって生じていることである。スカンジナビアの観点からみれば前述の自己中心的な行動はパフォーマンスの指向性が集団意思の理想を低下させるだろう、そのなかであって効

率性を高く評価し、正義と公正への関心を軽視することに導くことになるであろう(Christensen and Leagrid, 1998)。

結 論

これまで述べてきたとおり、こうした簡潔な見解からは完全なモデルが存在しないこと、またいかなる明確な解決策も存在しないことが明白となった。行政学は成熟することが求められている。しかしこのことは行政学が最新のファッションを受け入れることができないというわけではない。むしろ成熟化への道は各システムの伝統のもつコンテキストにあっては、一方で開発・秩序・正義そして公正の目的から必要とされる官僚の行動と、他方でそうした行動に対する満足のいくコントロール・監督そしてアカウントビリティとの間の大きなジレンマを解決するための最善のやり方に存在する。したがって効率性は中立的な用語ではない。そこでは政治的なディベートが相変わらず求められているのである。

行政学はある時に成長するだろう。その時とは私たちが権力を取り扱っているという事実をその行政学が受け入れる場合と、その行政学が集団的でコミュニタリアン的な解決策の必要性(常にではないが)から、社会内部での個々人とグループを取り扱う必要がある場合とである。権力は福祉・リソース・ルール・機会そして可能性を配分する。行政学は確かに権力について問題にするものである。多元的な社会において、このような諸課題は紛争と闘争を意味するものである。その理由はそうした諸課題に、政治的でイデオロギー的な立ち位置が含まれるからである。行政学という学問が実際上成長する場合とは、行政学がプロフェッショナリズムを基本にすることを理解している場合と、中立性が責任を無くすことを意味するものではなくて、市場が「正確な」回答ないしは「正しい」「最善の」あるいは「最適の」政策を生み出すことについて容認していることを理解している場合とである。プロフェッショナルの行政学とは、公にコントロールする能力のこと、そして対話構造のなかでの決定方法を説明する能力のこと、さらにグループの外側や政府それ自体の中で自由な討論に必要な諸条件を生み出しながら、当該プロセスに責任を持つ能力のことである。

以上をまとめておけば、アングロ・サクソン、ラテン、東アジアそしてスカンジナビアの各伝統から由来する考え方は、行政学が「成長していく」ために必要となっていることを理解するために重要なものとなっている。これらのモデルは、互いに学ぶことができるし、そうすべきである。同時にゼロの政治〔非政治のこと〕

として「中立性」崇拝を維持することは、対話的な政治を低下させ、応答的で高い能力の行政を劣化させることを意味する。中立性は効率性に対する懸念に関係してくる、正義と公正の適切な諸条件の言説に関与する能力を低下させてきた政府を味方するものである。したがって権力の現実に対処する唯一の道は、その対話を外に開放することである。なぜならば誰かが生活に関するその他の選択肢ないしは方法について真理と素晴らしい解決策を有していることを、誰も提示できていないからである（Ackerman, 1980）。行政学の文化モデルに関する横断的な栄養化によって刺激される対話は、その学問の成熟化を可能にしつつ、古い問題を取り扱うための新しいやり方を生み出すかもしれないだろう。いかなる場合においても行政学という学問は、私たちが思索させる文化モデルと共に生きているものである。この意味でいえば行政学の未来は輝いており、多文化的であり、開放的であるようにみえる。

参考文献

- Ackerman, B. *Social Justice in the Liberal State*; Yale University Press: New Haven, Conn., 1980.
- Arellano, D., Ramón, G., Ramírez, J., and Rojano, A. Nueva Gerencia Pública en Acción: Procesos de Modernización Presupuestal: Una comparación inicial en términos organizativos, Nueva Zelanda, Reino Unido, Australia y México. *Revista Reforma y Democracia* 2000, 17, 9-44.
- Arellano, D. and Guerrero, J. P. Stalled Administrative Reforms in the Mexican State. In *Reinventing Leviatán*; Heredia, B. and Schneider, B. Eds.; North South Center Press: Miami, 2003, 151-180.
- Barenstein, J. *El Análisis de la Burocracia Estatal desde la Perspectiva Weberiana*; Ce de Investigación y Docencia Económicas: Mexico City, 1982.
- Björklund, L. Justifying Community Membership: A Study About Petty Corruption in Stockholm. Paper given at ASSR Jubilee Conference on Corruption: Amsterdam, 12-1: December, 2002.
- Cabrero, E. *Del Administrador al Gerente Público*; Instituto Nacional de Administración Pública: Mexico City, 1995.
- Caiden, G. and Woong Kim. *A Dragon progress. Development Administration in Korea*. West Harford. Kumarian Press. 274 p. 1991
- Christensen, T., Laegreid, P., and Wise, L. Assessing Public Management Reform in Norway, Sweden, and the United States of America. *International Journal of Political Studies* 2001, 3 (3), 41-70.
- Christensen, T. and Laegreid, P. Transforming New Public Management. A Study of How Modern Reforms Are Received in the Norwegian Civil Service, Working Paper, Norwegian Civil Service, Research Centre in Organization and Management: Bergen, 1998.
- Chull, D. and H. Shyu. Political ambivalence in Korean and Taiwan. *Journal of Democracy*. 8 (3). Pp.

109-124. 1997

- Common, R. Administrative change in the East Asia Pacific : applying the political nexus triad. *International Public Management Journal* 7 (3). Pp. 347-364. 2004
- Crozier, M. *Estado Modesto, Estado Moderno*; Fondo de Cultura Económica : Mexico City, 1989.
- Fukuyama, F. Confucianism and Democracy. *Journal of Democracy*. 6 (April) : pp 20-33. 1995
- Guerrero, O. *Teoría Administrativa del Estado*; Oxford University Press : Mexico City, 2000.
- Gulick, L. *Papers on the Science of Administration*; New York Institute of Public Administration : New York, 1937.
- Helgesen, G. *Democracy and authority in Korea. The cultural dimension in Korean Politics*. Curzon Press. Richmond. 1998.
- Kim, W. B. and Bell, D. The theory and applicability of democratic elitism to Korean public administration. *East Asian Journal of Public Administration*. 1985. 8 (1). Pp 70-76
- Kliksberg, B. *El Pensamiento Organizativo*; Tesis : Buenos Aires, 1990. Aguilar, L. *El Estudio de las Políticas Públicas*; Miguel Ángel Porrúa : Mexico City, 1992.
- Laegreid, P. Administrative Reforms in Scandinavia Testing the Cooperative Model. In *Public Sector Reform. An International Perspective*; Nolam, B. Ed.; Palgrave : London, 2001, 66-81.
- Laegreid, P. and Olsen, J. Top Civil Servants in Norway : Key Players on Different Teams? In *Bureaucrats and Policy-Making*, Suleiman, E. Ed.; Holmes and Meier : New York, 1984, 206-242.
- Laking, R. Don't Try This at Home? A New Zealand Approach to Public Management. *International Public Management Journal* 1999, 2 (2), 217-235.
- Light, P. *Monitoring Government*; Brookings Institution : Washington, D. C., 1993.
- Meny, I. and Thoenig, J. *Las Políticas Públicas*; Ariel : Barcelona, 1992.
- Moon, M. J. and P. Ingraham. Shaping administrative reform and governance : an examination of the political nexus triads in three East Asian countries. 1998. *Governance* 11 : 77-100
- Motta, P. *Innovación y Democratización de la Gestion Publica*; Centro Latinoamericano de Administración para el Desarrollo : Caracas, 1989.
- Niskanen, W. *Bureaucracy and Representative Government*; Aldine-Atherton : Chicago, 1972.
- Olsen, J. *Organized Democracy*; Scandinavian University Press : Bergen, 1983.
- Osborne, D. and Gaebler, T. *Reinventing Government*; Penguin Books : New York, 1993.
- Ostrom, V. *The Intellectual Crisis in American Public Administration*; Alabama University Press : Alabama, 1972.
- Padioleau, J. *El Estado en Concreto*; Fondo de Cultura Económica : Mexico City, 1989
- Selznick, P. *TVA and the Grassroots. A Study in the Sociology of Formal Organization*; University of California Press : Berkeley, California, 1949.
- Spink, P. Possibilities and Political Imperatives : Seventy Years of Administrative Reform in Latin America. In *Reforming the State. Managerial Public Administration in Latin America*; Bresser, L. and Spink, P., Eds.; Lynne Rienner Publisher : Boulder, Colorado, 1999, 91-114.

多文化的環境における行政学の将来：アングロ・サクソン，ラテン，東アジアそしてスκανジナビアの行政的諸伝統からの教訓（アレノ ガルト）

Waldo, D. *The Administrative State*; Ronald Press: New York, 1948.

Welch, E. and W. Wong. Public administration in a global context: bringing the gaps of theory and practice between Western and Non-Western nations. *Public Administration Review*. 1998. 58 (1). pp. 40-49

Wilson, W. The Study of Administration. *Political Science Quarterly* 1887, II (1), 197-222.

注 本稿の原題は、The Future of Public Administration in a Multicultural Environment: Lessons from the Anglo-Saxon, Latin, East Asian, and Scandinavian Administrative Traditions である。ちなみに著者が2006年において、次の論文を改定したものである。Maturation of Public Administration in a Multicultural environment: Lessons from the Anglo-Saxon, Latin, and Scandinavian traditions, *International Journal of Public Administration*, 27 (7), 519-528, 2004.

付記 本稿は訳者が2007年9月にデヴィド・アレノ ガルト (David Arellano-Gault) 氏を勤務先に訪問して、メキシコを始め北米での行政学研究の現状と、現実社会の動向に関する意見交流をするなかで、彼から提供された論文のひとつである。そして今回、著者から許可が得られたので、日本語に翻訳するものである。アレノ ガルト氏への感謝を、ここに記して表したい。

最後に今回の作業は、平成19年度科学研究費補助金（基礎研究（B）「アジア太平洋諸国における公共部門モダニゼーションの多様性に関する比較分析」(研究代表、小池治) における研究成果の一部である。